

全体討議



【司会】阪神淡路大震災当時と今の大きな違いのひとつに、インターネットがあると思います。1995年当時、インターネットは日本では大学に少し入り始めたころで、一般ユーザーはそれほど多くなかったですね。今はフェイスブックなども連動しているということですが、当時と今はエフエムわいわいも変わりましたか？

【日比野】全然違います。総務省の免許で言えば、神戸という地域のエフエム局ですが、サルサラティーナのようにインターネットを活用したラテンアメリカコミュニティをつなぐ放送局でもあります。ほかの言語の人たちのコミュニティをつなぐ放送局だということでは、当時と様変わりしています。

【司会】インターネットは欠かせない存在ということですね。米倉さんは最後のところで、メディア特性と情報の色々な性質があるということをおっしゃっていましたが、被災地の、特に在日・滞日外国人の調査をなさっている周先生、李先生のお立場から、あるいはコミュニティラジオ局の立場から、大メディアに対してどういう役割を求めたいとお考えでしょうか。今日のお三方のお話で、コミュニティメディアの役割は非常に明確にわかってきたと思いますが、大メディアに関してはいかがでしょうか。

【日比野】まずは発災時に、迅速に、日本に住んでいるありとあらゆる人に多様な手段で伝えて行くこと。小さなコミュニティメディアには瞬発力が足りないので、多言語だけでなく、目の見えない人、耳の聞こえない人をふくめて直ちに情報を伝えて行くのはNHKのような大メディアの仕事、あだけ波を持っていますから、ひとつくらい波を潰してもいいのではないかと。

また、17年前には多文化多民族ということへの社会の応援が非常に大きかった。当時の私たちは、在日コリアンの人たちについて関東大震災のときのようなデマが広がっているということから、自前で送信機を作って海賊放送を始めた。そこから出発したラジオ局なんです。それを、社会が応援したのでですね。政府もそうです。17年経って今、特に韓国、朝鮮、中国に関してネットの世界では非常に厳しい発言をしている人たちがいる。今回被災地で海賊放送を立ち上げたとしたら支持が得られたかどうか、私は非常に疑問だと思います。ですから、NHKのスペシャルやクローズアップ現代の中で、日本の多文化化について取り上げるなら、非常にインパクトが強いですから、多様な豊かさを大メディアがしっかり伝えて行くことはとても大切です。

【司会】今のご発言に対して、米倉さん、いかがですか？

【米倉】発災時の緊急情報を的確に迅速に伝えて行くところは、本当にNHK含めて大メディアがしっかりやらなくてはいけない。ただ今回停電でテレビが使えない、ラジオが使えても通常聴く習慣をもっていないかたはラジオに考えが及ばない。それから、いっぱい波を持っているのだからひとつくらい、というお話は全くその通りだと思います。でもあのくらいの大災害になると、全ての波を使って、総合テレビと同じ内容を繰り返し伝えて行く態勢にプライオリティーが置かれてしまう。そこで、ひとつの波でも、あるいはインターネットでも、多言語なり、マイノリティー向けの情報伝達をどういうふうにするのかというのは大きな課題だと思います。課題だと思いますが、今は多様なメディア環境だと思いますので、先ほどは強調し忘れたのですが、メディアの間の連携、日比野さんのエフエムわいわいと現地の放送局とか、公的機関との連携がひとつのお手本になると思いますが、そういうことが技術的に可能になってきているわけです。ですからひとつのメディアだけで全ての情報をカバーすることはできませんし、その必要も無いだろうと思います。そこをうまく組み分け、連携をする、そのやり方を考えなくてはならないのではないかと。

【司会】李さんのお話の中に、結構テレビを見ている人がおおい、ということがありましたね。大メディアとコミュニティメディアの役割についてなにかお考えがありますか？

【李】私はメディア研究者ではありませんが、本当に一外国人として今回の震災とメディアのことを考えた場合、今もそうですが、どこのチャンネルも同じ情報しか流していない。一般的にもそうなんです、平常時はそれでいいかもしれないけれど、災害時にはチャンネルがいろいろあってほしいというのが率直な気持ちです。チャンネルをひとつにして常に緊急情報を流すというのであれば、別の形で収集した情報を流す、それはテレビではなくネット上でもいいかもしれませんが、収集した情報、しかも現地の情報を流してほしい。

【司会】今デジタル放送になっていくつかに分かれていますね。そういうことに対する対応ですよね。

【米倉】そうですね。

【司会】本当にどのチャンネルでも同じニュースをやっていますよね。周さん、いかがですか。今のこの問題について。

【周】私もメディア研究者ではありませんが、大メディアに関して言いたいことはあります。技術論でいえば、小メディア、日比野さんのお話にもありましたがエフエムわいわいの内容もNHKでやってほしいな、と。大メディアについては外国人の情報を日本人に伝える、互いに伝え合う、そういう情報が少なすぎて、その土台も出来ていないのではないかと米倉さんの指摘もありましたが、まずそういうところからやっつけていかなくてはならないかと思っています。

次のページへ続きます ▶

【司会】NHKには期待も大きいところがありますから、ぜひ米倉さんの発言力を高めていただいてNHKを変えていってほしいですね。あまり時間がありませんが、会場からの質問などをお受けしたいと思います。

【参加者】宮城県国際交流協会の者です。今日はメディアの役割ということですが、米倉さんがおっしゃった時間軸にそった役割が重要だと思うのです。ここにひとつ欠けていると思われるのが、携帯電話の役割、これは大変重要ではないかと思えます。大メディア、小メディア、その前に、誰でもが使っている携帯電話で発する情報があるはずなんです。実は宮城県はこれでシステムを作ったのですが、二日前の3月9日に起こった地震で大暴走してしまって11日にはその機能をうまく発揮することができなかったのです。携帯電話の会社などもこういった話し合いの場に交えて、もっといい機能を構築すれば大丈夫なのじゃないかと思えます。発災直後の情報は携帯電話、次の情報としては大メディア、復興は自治体ごとにスピード感が違うので大メディアでカバーすることはできませんからコミュニティメディアがそこで機能を発揮する、という、そういう時間軸での機能をもう少し検討したらいいのではないかなと思います。

【司会】ありがとうございます。なにか今のご発言にコメントがありますか。

【参加者】NHKの国際放送局の多言語展開部のディレクターをしています。私たちは毎日少ないスタッフで17言語で海外向けの放送を流しているのですが、在日外国人のかたがたへのサービスということで、中越地震のあと、災害時に在日外国人にどう情報を伝えるかという提言をするために部局内でプロジェクトチームを立ち上げて、やってきました。2006年から2008年だったと思いますが、在日外国人の方はどなたでも携帯電話を持っているということが分かっていたので、テキスト配信なのですが、5言語、中国語、韓国語、英語、スペイン語、ポルトガル語でニュースを、毎日更新して出しています。ただ、こういうことをやっていますというPRがなかなかできない。ホームページで音声ニュースなどを出している、それをテキスト配信で携帯電話でも見られるようになっていきます。ただ、その配信自体は無料なのですが、インターネットの接続料がかかります。ブラジル人のアクセスが少ないので身近なブラジル人に聞くと、インターネット接続料を払いたくないので見ません、という。そこで私たちは壁にぶつかってしまいました。今でも配信は続けていますが、現場からのひとことです。

【司会】エフエムわいわいもラジオを配るということをなさっている。ラジオのほうがその辺りはつよいですね。

【日比野】そうですね。ただ、コミュニティラジオの本当の役割というのは…。日本ですと、災害時、フェーズに合わせてですが、細かい情報を伝えていくという役割だけが注目されているのですが、世界を見ると、災害や紛争が起こるとコミュニティラジオが立ちあがるのです。何故なのか。先日私は南相馬へ行ってワークショップをやったのですが、そこは20キロ圏内、30キロ圏内、30キロ圏外、さらに南相馬市から外に避難している人々、地域の中で人々が分断をされているのです。地域的な分断だけでなく、例えば家の中でも子どもをめぐって夫婦の考え方が違ったり、原子力発電所事故によって、仲良く暮らしてきたコミュニティが分断される。南相馬のラジオ局が何をしているのか、という、なにがいいとか悪いとかではなく、分断された南相馬のひとたちの気持ちをちゃんとと言えるようなラジオ局にしようじゃないか、と。李先生がおっしゃっていたように、母国へ避難することに後ろめたさを感じる、しかしそうするにはそれなりの理由があり、そうした人たちがちゃんと自分たちの気持ちを伝えて、お互いの立場を分かち合うという、それが実はコミュニティラジオの大きな役割なんです。阪神淡路大震災のときに、私たちが災害ラジオを立ち上げて、それをずーっとやろうと思ったのは、日本の人々と外国の人たちがいっしょにこの地域で暮らしていく、お互いの理解につながるということに、割に早い時期に確信をした。なので、コミュニティラジオの免許を取ろうと思った。国籍が違う、民族が違う、障害のあるなし、世代が違う、いろんな人たちがコミュニティラジオ局に自分の声を伝えていられる、そういうメディアにしていく。そのことが私は大切で、その部分が日本のコミュニティ放送局の中ではまったく語られていない。今回、南相馬のような所には、世界のスタンダードに全く劣っていないすばらしいコミュニティラジオ局がある。特に復旧、復興のフェーズの中でコミュニティ再生、あらゆる人の、特に小さな声の人たちの声を伝えて行くことが大事な役割だ、と。その中に多言語がある、と。

【周】若干の蛇足かもしれませんが、今エフエムわいわいでやっていることが大メディアにとってはすぐヒントになるのではないかと思います。認知度が低いという話ですが、例えば中国人についていうと、(携帯配信ニュースの)認知度は低いですが、有名な中国人の歌手などが来て日本メディアでは殆ど報道されませんが、みんなで伝え聞いてコンサートを聞きに行ったりとか。非常に情報が伝わっているのです。本当にその地域の人にとって、必要な情報とは何なのか。お金がかかっても欲しいという情報。そういったことが必要なのじゃないか。

【司会】大変議論が盛り上がってきましたが、そろそろ閉会しなくてはなりません。最後の発言、申し訳ありませんが、手短かにお願いいたします。

【参加者】今から申し上げるのは提言と言う形だと思います。NHKが大きなメディアとして貢献していることは評価できますが、私は民放出身なので、今日の話し合いのなかに民放ということばが出てこなかった、これは問題だと思います。民放も民間放送連盟という団体がありますから、こういう大きなテーマはそこにアプローチして、非常時体制において役割を分担する形をとらないといけないと思います。災害時に放送要員を局が集めるのは大変なことで、重要だと思われることを選択してやるためにどの局も同じような内容になっているのではないか。災害時にはどの局がどの分野をやると言う話し合いが事前に行われれば人員の態勢もとれるのではないかなと思います。この点の研究がされるべきだという提言です。

【司会】ありがとうございます。民放の方、被災地の生の声、NHKの声、コミュニティラジオ局の声もあり、ほんとうにいろいろな声を聞くことができ、そして、現状を知るといってでも私も勉強になったところがたくさんありました。参加のみなさんには、今日はお天気の悪い中、また、長時間おつきあいいただき、本当にありがとうございました。4人の先生がた、ありがとうございました。

(おわり)